

準備委員会企画シンポジウム 12

「幼児教育・保育に教育心理学が果たす役割」

— 保育実践記録 保育実験研究 をめぐって —

企画者	角尾	和子	川村学園女子大学
司会者	野呂	アイ	尚綱女学院短期大学
話題提供者	梶	瑞希子	聖徳大学短期大学部
	無藤	隆	お茶の水女子大学
	佐伯	胖	東京大学
指定討論者	角尾	和子	前掲
	今井	靖親	奈良教育大学

はじめに

「保育」は、保護と教育を一体的に行う幼い子ども対象の指導をよぶ語である。「幼児教育・保育」は幼稚園の教育、保育所の保育のように、所管の区別を表して呼称している用語。ここでは幼稚園・保育所の指導を必要に応じ「保育」とよぶ。

この企画の背景

企画者角尾は、かねてから保育実践者と心理学研究者が相互に交流して保育の実践研究をすることを願ってきたが、実現が難しい。最近若い心理学系研究者の保育場面に通う姿をしばしば見るようになり、あらためて実践者との交流を願い、なにが実現を阻むのか探りたいと考えた。そこで下記のように人々の意見を聞く試みをした。*

- ・教師養成カリキュラムについて 主として心理学系
自主シンポジウム・日本保育学会(1993)
- ・保育研究と心理学研究 エッセイ記録をめぐって
自主シンポジウム・日本発達心理学会(1995)
- ・保育研究と心理学研究 幼児の文字の読み書き
ワークショップ・日本発達心理学会(1996)

* この結果以前にまして「教育心理学の教育・保育に果たす役割」の大きさを学んだ。同時にその「役割を果たすのはこれからだ」と強く感じている。

教科「教育心理学」に「保育」を

教科「教育心理学」は免許法改訂後も、保育者養成校のカリキュラムに存在しているが、保育場面に關わる内容であるとは言い難い。例えば(遊び)(環境と幼児)など、保育の基本的テーマを心理学系教科に取り上げているものはごく少ない。

「保育指導法」などの教科によって望ましい方法の教授はされる。然しその指導が実際どのような効果をもたらすか、教育心理学の立場から立証的に研究されていない。「保育」における心理学的基礎について衆知を集めることが必要ではないか。例えば「遊び」について述べれば <定義ができない、定義のないものは研究の対象に出来ない>とされる一方、高橋(1996)は<遊びの研究に際し研究者間の一応の了解を必要として「遊びの特徴」をあげている>また、無藤(1996)は<「遊び」の定義はかならずしも必要なしとして、幼児同士の遊びの発生を探る研究>を始めているなど、保育を語れば必ずふれる「遊び」の研究もこれから始まる感がある。

高橋たまき「遊びの発達学・基礎編」培風館 1996

無藤隆「幼児同士の遊びの成立過程」子ども社会研究 2 1996

教科「教育心理学」の内容が「保育」に近づくには「保育」に必要な心理学的な学びの基礎を開発的に固めることが必要である。そして養成校の学生時代から実践を研究的に検証することの意味深さを知らせ力をもたせたい。並行して保育実践者と心理学研究者が相互に交流する関係が生まれることを望んでいる。今回のシンポジウムではこれからに期待するものが大きい。

討議のテーマ

討議のテーマに次のことを予定している。

- ・研究に意味をもつ保育場面の記述について
- ・保育実践を、実験研究する可能性について

テーマ選択の理由

①保育場面の記述について

保育場面の記述については、子どもを全人的視野からみた幼児理解をめぐる様々な工夫がされている。子どもの生活に参与して観察する、主観性の分野に踏み込むなど、従来の心理学研究法の枠組みが変化している。保育場面の事象の記述と分析の方法は重要な研究課題である。津守(1980)の〈保育の体験と思索〉無藤(1995)の「身体知の獲得としての保育」は観察者手書きのメモが中心である。佐伯・刑部(1994)(1995)の〈「幼児の集団への参加における関係構造の分析」〉はVTR記録をもとに記述し分析解釈の検討を重ねている。手書きと、VTR記録ともに特色と限界がある。

また保育実践者は物語の観点から「エピソードの記録」をし、視点のありかによって次の教師の援助の手がかわる。そこで視点のありかが問われ、実践を積むことがもとめられる。

以上のような事情のなかで、保育実践の記述と分析について、研究に・実践に・意味のあるものになるように考究したい。

③保育実践の実験研究について

幼児教育の基本は「環境を通して行う」「幼児の自発的な遊びを通して総合的な指導を行う」ことを重視し、子ども中心の保育に大きく転換することが意図されている。新しい教育はかくあるべしと制度によって整えられたが、実践となると教師の心身の変革が必要であり、徹底の難しいところである。保育実践の場には多様な保育実践が行われ、かなり混乱している。保育者養成にあたる者は、毎年実習・就職に際してその実際を見聞し「これが子ども中心の保育であろうか」と、困惑することにも再々出会う。与える指導から、発達を促す指導への転換に際して、教育心理学研究は、これらを秩序づける役割を果たすことが出来るのではないかと考える。

子安は(1992)教育心理学の課題として、教育効果の検証をあげている。即ち「教育心理学の第一の任務は、様々な教育的はたらきかけや教育的関わりの効果をきちんと検証することにある」と。

子安増生「教育心理学の課題」教育心理学 有斐閣 1992

これまで幼児教育・保育の場面に確かなものを探る検証が十分におこなわれてきただろうか。環境を通してする保育と、総体として捉えた子ども

の発達との関係が見えるとよいと思う。これに添って教師の援助も具体的に検討されることも必要である。そこでアイザックスの実験研究を素材に、研究の方法を批判的に討議したい。アイザックスの業績は既に 矢田部(1949)永野(1981)榊(1989)による紹介があるが、これまで十分に紹介されていなかった部分(我々が当面している保育場面によく似たものを含む)幼児たちに自発性を十分に発揮させ、組織的に行動観察記録したものを中心に我々にとっての可能性を探る。

話題提供者の要旨

(榊 瑞希子)

スーザン・アイザックス(Susan Isaacs, 1885-1948 英国)のモールティン・ハウス校の報告書、「幼児の知的発達」(1930年・邦訳 明治図書1989年)と「幼児の社会性発達」(1930年)は、たいへんユニークな資料である。知識爆発と高度専門化の時代に備えた実験的な保育実践の概要を伝えるとともに、一群の幼児の3年半におよぶ組織的行動観察の記録をそっくりそのまま収めているからである。

理論編では、ピアジェの「自己中心性」批判、想像遊びと知的発達、自我確立と社会性獲得の過程、大人と教師の役割・機能などを論じたが、そのいづれもが、子どもを総体として捉え、発達をすぐれた教育との関係において理解する視座に貫かれている。彼女の実践は、幼児の中に周囲の世界をわかろうとする強い「探究」欲求(=科学的精神の萌芽)を認め、それを「表現」欲求と同等に満足させようとしたものである。そして観察事実から「幼い子どもは、大人の意志や大人の選ぶ環境に大変に左右されやすく、外界を確かめようと伸ばした敏感な触覚を、いつでも引っ込める身構えができています」と述べ、教師に次の3つの役割を課した。①「子どもに了解可能な形で、外界の諸事実を示す」環境設定者と観察学習のモデル、②子どもの「自己表現」を共に楽しむ遊び仲間、③子どもの「探究」に連れ添う「共同研究者」。

シンポジウムでは、豊富な行動記録の中から具体例をあげ、アイザックスの子ども中心の保育実践を紹介する。

矢田部達郎・「アイザックス夫妻の研究」思考心理学 2 培風館 1949

永野重史・「アイザックス・幼児の知的発達」自然科学と教育 講談社 1981

S・アイザックス・榊瑞希子・「幼児の知的発達」明治図書1989